

◎本会の動き◎

2017年度部会活動功労賞 (部会CT賞) The Award for Distinguished Service to SCEJ Divisional Activity

[部会CT賞表彰にあたって] (松方正彦 部会CT長)

化学工学会では、基盤技術分野として6部会および展開技術部会として8部会がそれぞれ横系および縦系として各学問分野での専門家集団を形成し、その分野の学会代表として積極的な活動を行っております。また、国際的にも我が国の研究者集団の代表として国際シンポジウムの開催を行う等、積極的に寄与致しております。このような部会活動は部会員の皆様の御努力によって支えられておりますが、特に若手会員の不断の貢献に因るものが大であります。この貢献に少しでも報いるべく2010年度より部会活動功労賞として部会CT賞が設けられました。

今回で8回目の表彰となり、引き続き貢献された個人のみならずグループにも表彰できる仕組みがございます。本年度は、企画、運営等の部会活動の活性化に大きく貢献された以下の2名の方と1グループを受賞者として選定致しました。受賞者への表彰は、2018年3月に関西大学で開催されました年会初日の開会式にて行われました。受賞者のこれまでの献身的な貢献に感謝するとともに、今後も部会を始め化学工学会の諸活動に御支援賜りたく、ここにお願ひ申し上げる次第でございます。

最後に、この度受賞されました2名と1グループに、心よりお祝いを申し上げます。

なお、第83年会における表彰式では、都合により、本部大会運営委員長河瀬元明氏より賞状・副賞を授与いただきました。

(以下、受賞者五十音順)

バイオ部会における企画・活動に関する顕著な貢献

河原 正浩 氏(東京大学)

【バイオ部会】

化学工学会のバイオ部会は、平成12年の設立以来、「快適な生活と健康の増進に寄与し社会に貢献するバイオ技術の発展」をミッションとして掲げ、生物プロセス分野、生物分離分野、メディカル分野、生物情報分野、環境生物分野、食糧・食品生産分野の6つの各専門分野分科会を中心に活動を続けてきました。具体的には、主催・共催する講演会や学会でのシンポジウムも毎年多数企画し、他学会と連携した講演会などの行事も定着してきています。



右：河原 正浩氏
左：河瀬 元明 本部大会運営委員長

YABEC (Young Asian Biological Engineers' Community) などの国際活動も継続して実施し、AFOB (Asian Federation of Biotechnology) においては、我が国からの Institutional Member として部会が参加するだけでなく、AFOBにおける日本代表を実質上勤めるなど、世界、特にアジアでのプレゼンスを高めてきています。News Letter を毎年発刊し研究者間の情報交換を深め、若手研究者も活躍し、化学工学会奨励賞も当部会関連の研究者が継続して受賞しています。特に、分野横断的な企画に基づく最新のバイオ関連技術の紹介や異分野間・異業種間の人的交流は、部会員のみならず学会全体への情報や技術の提供につながり、部会・学会の活性を高めていくために極めて重要と考えています。

河原氏は、2008年度から2011年度と、2016年度から現在までの計6年間に渡り、バイオ部会の幹事および庶務担当幹事として、部会の活性化のための企画・運営に貢献してきました。以下に、中核的な役割を担ってきたイベントについて紹介します。

河原氏の最も顕著な貢献は、バイオ部会メンバーが主体となって開催した国際会議 Asia Pacific Biochemical Engineering Conference 2009 (APBioChEC 2009) の庶務幹事の担当です。APBioChEC 2009 はアジア太平洋地域の計17か国から545名の参加者があり、2009年11月24～28日に神戸国際会議場で開催されました。8件の基調講演、12セッション計141件の口頭発表、375件のポスター発表、3件のランチョンセミナー、2件のイブニングセミナーにおいて、活発な討論が行われました。またレセプション・バンケット・エクスカージョンも開催され、交流が大いに深まった大変盛況な大会でした。河原氏は庶務幹事として、プログラム編成、1st/2nd Circularの発送、外国からの参加者のビザ発給用書類の送付、招待講演者への Invitation letter の発送や要旨・経歴書の回収などの個別の連絡対応、参加者からの各種問い合わせ対応や参加者への随時のメール連絡、学会開催助成財団に提出する趣意書の作成や報告書作成、会計など、あらゆる運営に関する業務に尽力しました。開催1年前から準備に奔走し、縁の下で大会の成功に多大なる貢献をしました。

また、2010年9月6～8日に同志社大学今出川キャンパスにて開催された化学工学会第42回秋季大会では、バイオ部会ポスターセッションをオーガナイザーとして運営しました。バイオ部会ポスターセッションは、午前中の全員のフラッシュ発表と午後のポスターセッションに分かれており、バイオ部会の学生会員はポスター賞への応募資格があります。河原氏はチーフオーガナイザーとして他2名のオーガナイザーと協力して運営にあたり、ポスターセッション発表者への連絡やポスター賞応募者の応募資格確認、審査員の依頼などの事前準備と、当日の司会進行、採点票の集計と表彰などを行いました。ポスター総数88件と規模も大きいセッションでしたが、無事成功に導きました。

さらに、河原氏はバイオ部会庶務幹事として計6年間という長い間、部会の運営に関する業務を行ってきました。バイオ部会役員会やバイオ部会会員総会における会場アレンジや書記の担当、およびバイオ部会事務局のサポートなどに尽力しました。その他、バイオ部会が中心となって運営しているアジア若手対象の国際会議 Young Asian Biochemical Engineering Community (YABEC) の2004年(大阪)、2008年(東京)大会の実行委員、化学工学年鑑やバイオ部会Newsletterの執筆、「化学工学」誌編集委員、年会の実行委員(2003年、2012年)、年会・秋季大会での数多くの発表や座長を務め、部会の活性化に大きく貢献してきました。

以上の理由により、部会CT賞の受賞に相応しいと認められました。



右：堀江 孝史氏
左：河瀬 元明 本部大会運営委員長

石エネルギー(株)(現：JXTGホールディングス)根岸製油所を開催するなど、その活動の幅を広げています。また、2013年の第78年会では反応工学部会が主催した国際シンポジウムにおいて、韓国の若手研究者2名を反好会で招聘し、部会の国際交流活動の一部を担当しました。

そのような講演会開催と国際シンポジウムの担当の経験を踏まえ、2017年の化学工学会第82年会では、「Towards Process Intensification: Multiscale Integration of Reaction and Separation Systems(プロセス強化に向けて：反応と分離システムのマルチスケールな統合化)」と題した国際シンポジウムを主催しました。この国際シンポジウムは、学会本部と部会幹事からの要請に応えた形で、反好会からは堀江氏、中川氏、渡部氏が、部会事務局の谷屋氏と一致協力して企画し、材料・界面部会の共催とダイナミックプロセス分科会の協賛で開催されました。招待講演者には、アジア諸国(日本、台湾、韓国、中国)で活躍中の新進気鋭の若手研究者を産学から選出・招聘し、反応工学の領域を越えた分野横断型の若手国際シンポジウムとなりました。講演プログラムの内容は、国内招待講演が4件、海外招待講演が3件の計7件(各講演30分間)で構成し、年会における大会初日の目玉企画の一つとなりました。当日は、常時60名以上の参加者が聴講し、また活発な議論を重ね、最終的には100名以上が参加した盛況な国際シンポジウムとなりました。本シンポジウムの終了後には、海外講演者との間で継続開催の話し合いが行われ、今年2018年の“International Workshop on Process Intensification 2018(台北市)”において、第2回若手セッションシンポジウムを開催することが合意されました。

反応工学部会では、国際及び国内における学術交流の促進を通じた部会員の活性化を目標の一つに掲げています。堀江氏らの7年間に亘る若手会活動と今回の国際シンポジウムの開催は、反応工学部会の活動目標に大きく貢献するものです。

以上の理由により、部会CT賞の受賞に相応しいと認められました。

反応工学部会の国内及び国際活動に貢献する 顕著な若手企画と運営

反好会(反応工学部会若手会)

構成メンバー：

堀江 孝史氏(神戸大学)

中川 敬三氏(神戸大学)

渡部 綾氏(静岡大学)

谷屋 啓太氏(神戸大学)

【反応工学部会】

反応工学部会若手会(反好会)は、堀江氏、中川氏、渡部氏らを幹事役とする反応工学部会の若手研究者の組織です。この会は、反応工学や化学プロセスに関する講演会を毎年春と秋の化学工学会研究発表会の前日に開催し、部会事務局担当の谷屋氏と連携しつつ、2010年3月以来、これまでに14回の講演会を開催してきました。各講演会では、部会内の各分科会に所属する若手研究者や企業の若手研究者、加えて博士課程所属の学生に話題を提供してもらい、学術交流や情報交換を図る活動を継続してきました。また、講演会と同時に工場見学会(第10回反好会講演会、JX日鉱日

粒子・流体プロセス部会の分科会活動を通じた部会活性化と
国際シンポジウム運営に関する顕著な貢献

山田 真澄 氏(千葉大学)

【粒子・流体プロセス部会】

2017年5月に第3回マルチスケール混相プロセス工学国際シンポジウム、MMPE (3rd International Symposium on Multiscale Multi-phase Process Engineering) が開催されました。このシンポジウムは、1988年～2006年の間で7回に渡り日本とドイツで交互に開催された日独気泡塔シンポジウムを発展的に解消し、日独の若手研究者が中心となってシンポジウムのコンセプトから運営方法までを見直し、新しい枠組みでスタートした国際シンポジウムです。

2011年に第1回MMPEが金沢で、2014年に第2回MMPEがハンブルクで開催され、今回の第3回MMPEは富山で開催されました。日本で開催する場合には、粒子・流体プロセス部会、気泡・液滴・微粒子分散工学分科会のメンバーが中心となって実行委員会を編成しています。山田氏は、実行委員の中心メンバーとして、国際シンポジウムの運営に必要な資金獲得に向けた準備作業に深く関わりながら、シンポジウム全体像の設計や、スケジュール設定作業に大きく貢献しました。また、山田氏は、冊子版のProceedingsとUSB版のProceedingsの原稿作成を担当しました。限られた時間の中で原稿に関して著者との必要な連絡を行い、並行して各著者から提出された原稿の綿密な確認作業を進め、Proceedings完成まで精力的に活動しました。第3回MMPEについては、粒子・流体プロセス部会ニュースレター (http://www2.scej.org/partfluid/data/newsletter/NL017_170713.pdf)、気泡・液滴・微粒子分散工学分科会ニュースレター (http://www.applc.keio.ac.jp/~terasaka/BUDROPE/BUDROPE_NL17_170730.pdf)、ドイツ研究振興協会DFGのDFG日本代表部のニュース (http://www.dfg.de/jp/aktuelles/berichte/2017/170508_mmpe2017/index.html)にも紹介されております。

第3回MMPEでは4つのKeynote Lectureが企画されました。ドイツおよび日本から2名ずつのKeynote講演者が選ばれ、山田氏は日本側Keynote講演者の1人でした。山田氏は、「Microfluidic Multiphase Processes to Produce Functional Biomaterials」について講演をし、粒子・流体プロセスの基盤技術であるマイクロ流路における混相流の流動制御法を、生物生産プロセスのバイオマテリアル作



右：山田 真澄氏
左：河瀬 元明 本部大会運営委員長

製や細胞操作に応用した、異分野融合による新しい研究分野開拓の成果を紹介しました。今後の山田氏の研究の展開が注目されます。このように、山田氏は、第3回MMPEに関して、様々な業務をこなし、シンポジウムの成功に多大な貢献をしました。

また、山田氏は2016年3月より粒子・流体プロセス部会、気泡・液滴・微粒子分散工学分科会の企画幹事を務めており、分科会の行事活動を支えています。化学工学会年会と秋季大会では、気泡・液滴・微粒子分散工学分科会総会が行われ、その後に分科会の恒例行事である気液固分散工学サロンが行われます。サロンでは興味深い研究を行っている企業や大学の研究者を招待して講演会を開催しています。その後には、参加者の懇親の場を設けています。山田氏は、サロンでの講演の企画と、講演会場や懇親会場の手配や受付、司会など、サポート役として大きな貢献をしています。また、分科会が主催する秋季大会シンポジウム「気泡・液滴・微粒子分散工学2016～2017」のオーガナイザーとして、関係する分野の方へ講演申込みの案内・勧誘、プログラム編成、招待講演者への対応、座長等も務めています。

以上の山田氏の活動は、気泡・液滴・微粒子分散工学分科会のみならず、学術的・技術的に深くつながりがある粒子・流体プロセス部会ならびに部会に所属する各分科会の活性化に大きく貢献するものです。

以上の理由により、部会CT賞の受賞に相応しいと認められました。